

青い嵐



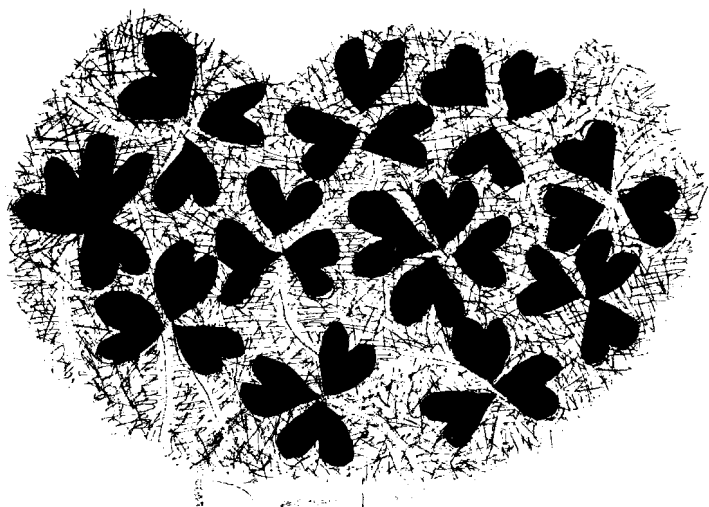
キューポラのある街

5

る街／第5部

青い嵐

早船ちよ



理論社刊



キューボラのある街 (5)

青い嵐

© 1972 年 3 月 第 1 刷

定価 500 円

作 者 早 船 ち よ

発行者 小 宮 山 量 平

東京都新宿区若松町104

発行所 株式会社 理 論 社

電話東京 (203) 5791=代表
振替口座東京 95736

0393-90605-8924

1972年初版発行

大人になったあなたへ

さようなら

大人になった ジュン、ノブ子、光男……

そして、宏一、ハジメ、リスちゃん

一九七〇年代、嵐のなかを歩いていく

突っ走っていく あなたたち

ひとまず、さようなら

ころんだら ひとりで起きあがる

傷ついた膝を なめて

歩き、また歩きつづける。

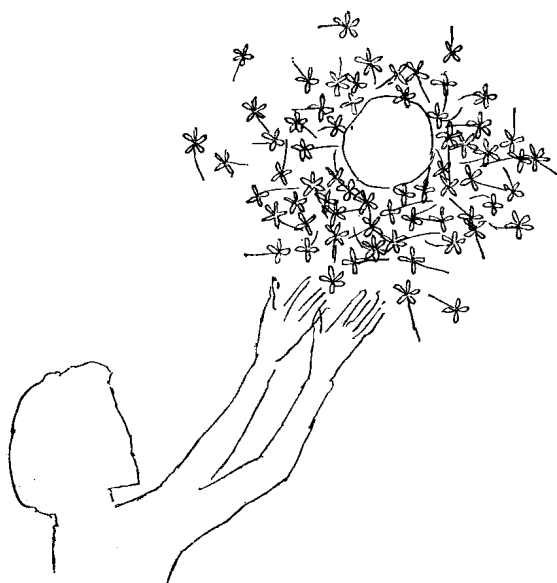
寄り道したり、後もどりしたり

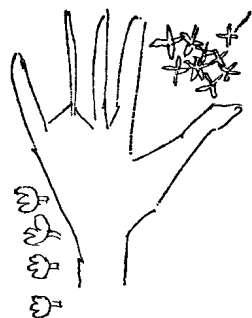
崖道をふみ外すようなことがあっても

この道は あなたの明日へつながるみち

若さは、たっぷり、あなたのもの

——まえがきに代えて

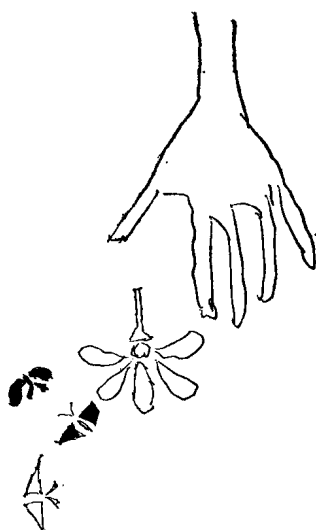




第一部

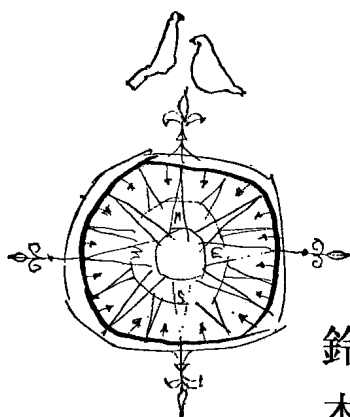
1	あなたはキューポラの街の娘	5
2	おかえりなさい……	25
3	重たい花冠	36
4	再出発のかどで	44
5	たたかいはこれから	55
6	あしたの大学	63
7	ベトコンたち	84
8	松柏学園	95
9	歌うのも遊ぶのも好き	103
10	ひとりごとを止めぬ	125
11	奇蹟のような朝	133
12	冷暖房つき	142

第二部



11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
ソレ南蛮鉄でも	つぶれたふうせん	二・四沖縄統一行動デー	マイカーのある生活	デモに、いきます	22時・23時・24時	玉に賭ける	目下修業中	負けっぱなし	民族の歌と踊りの祭典	青い嵐の気圧配置
302	290	270	256	243	229	208	201	192	165	153

あとがき 小宮山量平 309

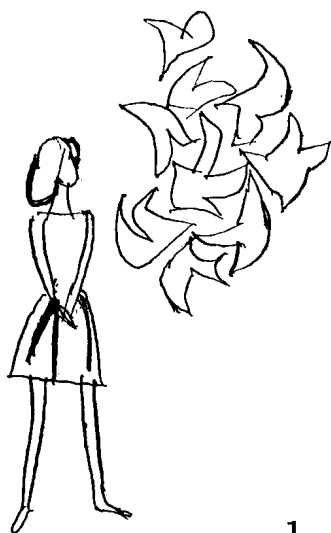


そうてい・カツト
鈴木 義治

第一部

1 あなたは

キューポラの街の娘



目ざめに、ハトが啼いた。

軒端のハト小屋から、甘い含みごえで、グルグル、グルウ……。一わが啼くと、べつのハトが、ルルウル……。ルウとこたえる。つがい、どうしは、大まじめな顔で、愛のつぶやきを、あきることもなく啼きかわしているのだった。

「あそこへ行くわよ、あそこへ」

窓そと、隣家の柿若葉をゆるがして、四月終りの風が流れこむ。

ジュンは、風のそよぎに向かって胸をはり、手

を上下に屈伸し、からだを前後左右へ振る。二十歳のからだは、しなやかに弾み、髪の毛が、ぱさつと、たたみを打ち、ぱつと勢いよく、空中にひるがる。

「かあちゃん。あそこへ行くよ」

「ジュン！ そんな乱暴をして肩が痛いったって、知らないから」

「うつふん。ずいぶん長いあいだ、手をいたわってやったもん、なんともないみたいよ」

「なんて、横着な病氣だ」

「かあちゃんだって根をつめてやってると、まず、右手の親指の付根から痛んでくるよ……それから手首、そして腕へ……」

「かあちゃんは、ケンシヨウ炎になんてぜいたく病になれない性さ、休んだら一文も、誰もくれないからね」

トミは、夏もの子どもセーターに、せっせと毛糸で刺繡しじゅうをしているのだった。青葉のデザイン。噴水がふきあげて、QQと、おどけた水玉をちらしている。青空にの字をかく、ひこりき雲。そこには、もうま夏がきている。

ジュンは、トミのそばへすわって、刺繡糸と針をとりあげた。てのひらへ入りそうな、小さなベビー・スモックに、青蛙をぬいとしてみようとして、やめた。

「だめね、あたし下手だから……かあちゃんのごとおしやかにしては、申しわけないもの」

「やってごらん」

トミは、目を細くして、赤と黄色の糸玉をころ

がしてよこした。

「ジュンにあげるよ、ジュンのあかちゃんに似合うようなのを、つくってごらんよ」

「おう！」

ジュンは、びっくりした声で、ひざの上の毛糸玉とベビー・スモックをはらいのけて立上がった。

トミは、声をあげてわらった。

「かあちゃんたら！ おどかさわね。いやー」

「それは、ねえ。女の子が、十六歳か十七歳になると……いえ、いえ、十一、二歳のときでもその母親は、どこから、いいひとが、つれにきてくれそうな、じれったいほど、待ちどおしい気がする……」

ジュンは、トミの顔をじつと見つめて、声をあげて、わらった。

「ほんとうだよ、母親って誰でも、そんなふうに心待ちしてるんだよ」

「それ、あかちゃんのこと？」

「そうとばかりも、いえないけどね」

しかし、そうだといつてもよかつたのだ。トミは、目をあげて、まぶしげにジュンを見た。手も、足も、のびのびと成熟したひとりの女性を。

もう夏になるというのに、五十歳近いトミの夜着のえりもとに、すうすう、隙間風がしのびこむことがある。そんなとき、ずいぶん長くあかちゃんを抱かなかつたな——と、肌さみじい。あまずつばい寝息をたててねむる子を、脇に抱いて添い寝をしたい。おしっこをもらしたやわらかい尻を、ほとほと叩いて、「こら」というと、きやつきやつと、幼いジュンは、よく笑つたつけ。そんな肌ざわりが、飢えたように懐かしい。

「いくつだっけか？　ジュンは」

へんじはない。ジュンは、勝手手で茶のしたくをしながら、きく。

「とうちゃんは？」

「足馴らしたよ。家のまわりをぐるつとまわって、調子がよかつたら」寅工場の近くまでゆつくり、ゆつくり歩いてみるべってよ」

「ふーん、やつぱり、鑄物鉄の臭いがかがずにやおれんのね。タカユキは？」

「ゆうべ、帰ってこなかつたけどね……けさ早くきて、めし食って、弁当を自分でこさえて、出たつたよ。学校へいったんだらうよ、かばん持ってたもの」

「ふふふ……」

「何を笑うことがあるのかね」

「だつてさ、あはははは……」

——母は、タカユキも、わたしも独り歩きしているばかりか、夫の辰五郎まで病気が回復して足馴らしをはじめたので、母性愛の出どころがなく、なにかわけのわからぬ欲求不満なのだろう。「ジュンは、笑うけどな、年齢を考えな、女が二十歳になるって、たいへんなことだよ、かあちゃだつて、もう子どもがいたんだからね」

その話なら、なんとか聞かされている。生まれで二ヵ月そこそこで、肺炎で亡くした長兄のことである。

「おぼえといて、かあちゃん。あたい、女が二十歳だからどうのってより、もつとだいたいな問題にぶつつかってゐるのよ」

「しごとのことかね？ 《守る会》かね？」

「どっちもよ、《学習》もよ。これから、工員寮へいくわ」

「おそすぎるだろうよ、いまごろになつて……。なんなら、拓郎さんか奥さまに、電話をかけてもらつてから行つたら」

「いや！」

「ちがうよ、一言通じてもらうだけで」

「そんなら、なお、いや」

「……」

「じぶんでやつてみる」

ジュンが、「はい、お茶」と、茶碗をだすと、トミは、それをふいてさますふりをして、大きなため息をついた。

「かあちゃん」

「……」

「ねえ、かあちゃんは、ふたりのひとをふたりとも好きだなんて、あった？」

トミは目をむいて、茶わんをテーブルの上へ、がたんとおく。

「ねえ、かあちゃん、とうちゃんと結婚してから、ほかのひとを好きになるなんて、なかった……」

トミは、息をのんだ。しばらく考えていて、ほうっと、ためいきをつく。

「なんてことを聞くんたい、いまの子って、こわいことをいう……」

「ねえ、ねえ。ほんとのこと聞かして。女どうしとしてさ」

ジュンは、トミのひざをゆすぶる。トミは、きつとなつて、

「ジュン。聞くけどね、おまえ、ジョーと」

「そうよ、そうなのよ」

「ジュン、おまえ。もしかしたらジョーと」

ジュンは、わらいだす。

「あいつを、ちよつと好きなのよ」

「ばか！　なんか、あったんじゃないか」

「ははははは、ははははは」

「あいつ、ぐれてはいないけど、なまけで根のつづかない男さ。あんなやつと、いっしょになつてみな。それこそ、かあちゃんより苦勞をするから」

トミは、大決心の顔で切りだす。

「拓郎さん、きらいか？」

「いいえ、なぜ、そんなことをきく？」

トミは、ジュンの目に射すくめられると、たあ
いもなく白状してしまうのだった。

「このあいだ奥さまが……いえさ、何も正式の話
なんかは、まだだったけどね」

「あーら、恵子夫人ならノブ子に、定時制へいく
铸物職人の娘となんかつきあうなど、いったわ。

中学生のころ……」

「弱っていなさるようだったよ。拓郎さんも、ノ
ブ子さんも、それに……それ、拓郎さんの下の息
子さん——ああ、ああ、泰郎さんといったかね。
末っ子の三郎さんも、ひとりとして親のいうこと

を聞こうとしないって」

「ふふふふ」

——親はなぜ、子どもをじぶんの思うように歩
かせたがるのだろう。

ジュンは、半袖の白いブラウスに着がえ、洗
晒しのジーパンをはく。

「工員寮へ行くつてたろう。そんなサンダルばき
なんかでさ」

「だって、かあちゃんは、もう後釜がきまつて、
就職はだめだろう……つてたじゃない」

「めしを食ったか」

「ははははは」

ジュンは、こんどこそ、大声で笑いだした。

お勝手に、大きな握りめしが二つ、竹皮につつ
んだまま、あった。タカユキがじぶんのお弁当に
こしらえたのを、そのまま、忘れておいていった
のだろう。ひとつは梅干、ひとつにはタラコが入
つて、じょうずに海苔でくるんであった。それを、
そっくり、ごちそうになったのである。

家まで、まもなく、トミが、大きな風呂敷包みをかかえて、追いかけてきた。

「ジュン！ 待ってくれ。お願いだから、おまえ、駅まえのツル屋商会へ、このしごとをとどけてから、出かけてくれ。すまないね、急ぎのしごとなので、けさは五時おきしてやっとなで仕上げたのだよ」

トミは、成長した娘に、頭をさげんばかりにしてたのむのだった。

*

駅まえ広場では、まだ改装工事をやっている。

地下道をつくるために、大型のパワー・ショベルで、土を掘り返している。板がこいした工事場のあいだの渡し板を、人びとは気ぜわしげに行き来し、せばめられた駅まえ通りを、トラックやダンブカーが、じゅずつなぎにつづき、やけにクラクションをならす。ジュンは、「さくら公園行き・仮停車場」を、やっとなで見つけることができた。

五、六人の行列のあとについた。

埃っぽい風がふいてきた。広場むこうの鋳物産業ビルの屋上からたれさがった白い幕がふくらんで、「歓迎」と太い筆描きにした字が、浮きあがってみえる。ジュンは、その下にかかれた一字一字を拾って、よむ。

「……あなたは、きょうから、キューポラの街のひとです。」

「なにをいってるの。あたしは、もともとから、キューポラの街の娘よ」

ジュンは、風にはためく垂れ幕の字を、たしかめながら、もういちど、前半からよんでいく。

歓迎 学卒のみなさん。就職おめでとう。

あなたは、きょうから、キューポラの街のひとです。

声にだして読んでいるとそれは、自分に向けて書かれた文字に思えてくるのだった。

——でも、おめでとうなんて、意地わるよ。あたしのバイトは、まだ、きまってないんです。しかも……

——「就職」ではない。病氣療養のあいだのバイトにしかすぎないのに。

駅の改札口から、「歓迎」の垂れ幕へむかって、ふたりの少年が突進するみたいに歩いてきた。ひとり、「おい」と、ジュンのそばまできた年上の白シャツをよびとめる。

「『歓迎』と、かいてあるぜ、ほら」

年下の少年は、学生帽をぬいで腰の手拭いで、汗をぬぐう。

「おれらを、誰が、誰が歓迎してくれるの」

「ばっかだな、おめ」

十六、七歳、年長者が振り向いて、吐きすてるようにいった。

「あの垂れ幕はな、中卒の新人向けに出されてたんだい、三月末から四月はじめの、就職のシーズンにな」

「いまは、もう、シーズンオフなのか」

「しまい忘れただけなんだい」

「なして、しまい忘れただべな」

後ろから、ジャンパーを肩にひっつけた三十男が、足早にやってきて、いきなり、チビの少年の肩を、ぱんとたたいた。

「ほれ、おめらのようにさ、一足おくれで、キューポラの街へ就職する子もあるからだよ。さ、行こう、行こう」

三十男は日焼けした顔の大口をあけて、笑い飛ばした。年長の少年は、つられたように笑い、チビの少年だけが、焦点のきまらない目で、きよときよと、あたりを探している。

ライトバンが疾走してきた。少年たちは、ジャンパー男とともに車内へ吸いこまれ、ドアが、ぱんとしまる。排気が、ぶわっと、ジュンにふきつけた。

——あの子たち、どこへ就職したのだろう。チビの少年の心もとない目つきが、ジュンの気

持にひっかかった。

「さくら公園」行きバスがきた。とびのつて、進行方向をのぞくと、フロントガラスをかすめて、

ライトバンが、赤信号の手前でとまるのがみえた。

バスは、ライトバンに追いつき、信号が青にかわった。ライトバンは、右折し、バスもまた、その後から、ゆっくりと右折する。ジュンは、窓外のバス停留所の名をたしかめてみる。

——やっぱり、そうね、あたしと、おなじコースを行く。もしかしたら工員寮行きよ、あの子たち。

——そして、ジュンが、寮母になり、そのめんどろを見ることになったら……。

太陽が、かげった。バスは、煤塵の降る埃っぽい街を、がたがた、ゆれながら走る。

——よし、この「追跡」から、あたしの可能性をさぐりだしてみせるぞ。

ジュンは、肩をすくめて笑い、驚馬^{どが}のようにのろいバスに、ムチ打ちたい思いだった。ジュンは、

よく見はっていたのに、はしっこいライトバンの姿を、たちまち見失ってしまった。

*

「さくら公園」停留所でバスをおりると、ブロック塀で大きくかこんだ、四階建てコンクリート造りがみえてきた。

大きく迂回して、「キューポラの街・工員寮」と門札のある入口へでた。そこから門内へ入って、あつと驚いた。

屋上から正面玄関のポーチへ、白い垂れ幕がさがっている。駅まえ鋳物産業ビルのものと寸分ちがわないもので、もしかしたら風に吹きとばされてきて、ここへぶら下ったのじゃないかと思われるほどだったし、「歓迎」という字だけ横書きで、その下の縦書きの一字一字は、対決をせまるみたいに、はつきりとよみとれる。

——そうだ、あのライトバン。

門内には見当たらない。門の外へでて、ブロッ

ク堀ぞいに、さくら公園をめぐる道路、交叉点のあとさをたしかめてみる。

——しまった。あのライトバンを見失っちゃったかな。あの子たち、どこへ連れていかれたらう。ジュンは、あきらめて、門のなかへもどっていった。

工員寮の正面玄関は、一枚ガラスの回転ドアになっている。金色のノブを押そうとして、ぴかぴかに磨いたガラスに、じぶんの像を見出した。

——やーだ。あたしったら、こんなかつこうのまま、きちゃった。

白い半そでブラウスが、青葉のなかに、きわだって浮かび上がっている。おなじ白いりぼんで髪を束ねているのが、ひどく子供じみていた。ツル屋商会のマーク入りの大きな紙のバッグには、母のためにあずかってきた内職の材料がごっそり入っている。つぎのあたったジーンズに、素足のサングラス。寮母志望者としては、板のつかない恰好だ。

出なおしてこなくちゃ……と思った。

そのとき、回転ドアが内がわから、くるりとまわって、ピンクいろのカーディガンを、ショールのようにひっかけた二十歳ばかりの女性が、ぱつと、とびだしてきた。ジュンと、おでこの鉢合わせをしそうになって、「わぁ！」と、おおげさに叫んだ。近眼の大きな目を、まじまじと見はって、ジュンを見つめた。しばらくして、詰問するようにいった。

「あんたは、誰？ あんたはどこの店屋へ就職がきまったの？」

——いえ、いえ。あたいは工員寮のママさんにならないかとすすめられたので……といおうとして、はっと気づく。

——このひと、あたしの代りにママさんにきたにちがいない。わたしが、ぐずぐずしているうちに、一足ちがいで寮母の椅子にすわっちゃったのだろう。

ピンクのカーディガンの娘は、ピンクいろに染

めた爪の手を口にあてて笑った。

「あなた、あわてものね。商員寮なら、バスで三停留所いった、鍋屋町銀座にあるのよ、鍋屋町停留所でおいて、その交番できくと、よく分るわよ」

「わたしは、工員寮へきたのです」

「ここは、工員寮の工。あなたの行くのは、商員寮の商。工でなくて、商よ。わかった？」

そのとき、門へオートバイが入ってきた。

クリーニング屋らしい青年と、回転ドアの内部へはいっていきながら、ピンクいろカーディガンの女性は、ジュンをふり向いた。

「ちよつと待っててね。娘さん、すぐ、もどってきてあげるから」

ほんとうにすぐ、一分間ほどで、くるりと回転ドアのあいだから、ピンクいろカーディガンの女性が、赤いルージュの唇で花のように笑いながらあらわれた。おでこの下の丸い目で、ジュンの頭のさきから、古ぼけたサンダルまで、調べるよう

にみながら、いった。

「あなた、どこから迷いこんできたの、職場からとびだしてきたのと、ちがう。いいえ、いいのよ。たとえ、家出をしてきたんでも、ほんとうのことをいって、寮監夫妻に相談なさいね」

「……」

「ここも、商員寮も、おなじシステムになっているから安心していきなさい。どの店の売り子になっても給仕さんになっても、配達さんになっても、直接雇傭じゃないから、やんなっちゃったって、安心よ。とび出したりすることはない」

「いいえ、いいえ、あたしは」

「ほんとうは、市の労政課が里親がわり、身もと引受けになってるんだから、寮監さん、ママさんに、なんでもいいにいく。むろん、給料のことも、転職のことも」

ジュンは、あつけにとられた。ピンクいろカーディガンの娘は、得意になって、ひとりでしゃべりつつける。